

五月二十五日だと記憶している。いよいよ乗船だ。「万感胸に迫るといふのは、今の気持ちか」と、つくづく実感が湧いてきた。船の中のこととは嬉しさのためか、今はぜんぜん思ひ出せない。

敦賀に入港して母国の山々、家々が目に入り、懐かしさでいっぱいだ。「ああ生きて帰ったのだ」と。

船から上陸すると、出迎えに出たのは厚生大臣の中山まさ女史とのことで、日本でも女の大臣が生まれたのだと聞かされた。頭から真っ白になるまでDDT（今は使用禁止）を掛けられ、身体検査があり、二日目、金額は忘れたが金を貰い汽車に乗り故郷に向かう。途中東京駅で、二年前に帰国した弟の邦広が迎えに出てきてくれ、お互いの無事を喜びあったが、その時はじめて妻が昨年死んだと知らされてびっくりして、本当とは思えなかった。一回手紙を受け取ったことがあったが、その後の様子は全然判らなかつた。

辰野の駅に弟や妹が迎えに来てくれて懐かしくて手を握りあった。伊那町駅には町長はじめ区長や共産党や一般の人が大勢迎えてくれていた。駅前で帰国の挨拶

をしたが、共産党かぶれしていたので、内容はソ連の宣伝みたいなものであったと思う。後に聞いた話では「えらく元氣のよいのが帰ってきた」とのうわさであったとか。

我が家に帰ると母が「まあ年をとった」と思われ、抱きついて泣いた。多くの親戚が集まって迎えてくれたが妻の姿はなく、子供は小さいのでキョトンとしている。それを見て私は妻は死んだのだとしみじみ実感が湧いた。

二度と戻ることの出来ぬ思い出

南洋―満州―大連の重労働

佐賀県 小松 莊 市

私は長野県で、雄大な富士山の見える諏訪の富士見高原地帯の山林と農業で生計を立てていた家の長男として、大正十一（一九二二）年に生まれた。母は昭和六（一九三一）年三月二日、私がまだ小学校二年生九

歳の時、三十二歳の若さで、男三人を残しこの世を去ってしまった。そのため、私は弟のおしめを洗って学校へ行った。

半年後の八月、新しい母が来て三人の子供が次々と生まれ、私は口減らしのため他家に預けられ、そこから学校に通い、卒業後は実家に戻り父の手助けをすることになった。昭和十六年八月、従兄にすすめられ、父を説得して南洋群島のクエゼリン島へ軍属として働きに出かけ、徴兵検査のため帰国するまで、軍人ならぬ軍夫として勤務をした。

従兄に南洋の話聞き、岡谷の職業紹介所の募集に応じたのである。八月三十一日夕方、岡谷に集合し横須賀へ行った。班が編成され、認識票を渡され、肌身離さず身につけておくように言われた。自分の班は第四十二班で、後に「シニ班」と言われ、死体を火葬にする「おんぼ」をさせられる羽目になった。南洋は下痢が多いからと、「正露丸（クレオソート丸、当時「征露丸」）を買って出発した。

船は一万三〇〇〇トンの「ブラジル丸」で、出航後

は速度を速め、八昼夜かかり南洋諸島のクエゼリン島に到着した。途中、全員船酔いでほとんど食事もとらず、ふらふらで上陸したが、クエゼリン島と言えばハワイに最も近い、日本にとっては重要な海軍基地である。後にハワイ攻撃の時はここから出航した。我々の使命は潜水艦の寄港する基地造りであった。

付近の島には珊瑚がいっぱい。クエゼリン島は全長約八キロ、幅は八〇〇メートルぐらいの湾曲した島である。我々の宿舎は海岸沿いに何列も長く作られ、道路の向こうに司令部、その東に第一小原部隊、その西に第二小原部隊があった。

軍夫という軍属は二千人ぐらいおり、入れ墨をした人の多いのに驚いた。職別の編成があり、鳶職・大工・水中班等に分かれた。私等は土工雑役で、翌日から作業が始まった。内地と違い、夜の明けるのが早く（四時）日没も早かった。朝食は大きな飯場があり、まだ夜の明けぬうちに食べに行く。醬油樽にご飯を入れてあるので、遅く行くと樽の外側の塩気をついた飯を食べるようになるので、早く行き真ん中を掘って食

べた。おかずは、いつもコンブとヒジキだけである。炊事も風呂も井戸水を使うが塩分のある水であった。

朝食が済めば、国旗掲揚・国歌斉唱、朝礼が済めば作業現場に歩いて行く。ほとんど休日は無い。作業は夜明けから日暮れまで、ただしコンクリート作業は潮の間（干満）で行い、時には夜間作業もした。最初は椰子丸太の運搬・組立・型枠の据え付け、コンクリート打ち。私共は砂バラス、その他材料の運搬とコンクリートという作業である。

軍夫は全員、越中ふんどし一つで他は真ッ裸である。汗をふくのも顔を洗うのもふんどしであった。最初は裸体のため日に焼け、夜はビリビリ傷が痛く、その上蚊に攻められて眠れぬ夜もあった。昼食は、トロッコに乗せて現場に運んでくるが、おかずは相変わらず、コンブ、ヒジキだけであった。最初から最後まで、このおかずは変わらなかった。

日焼けの方も二回皮がむけた後は丈夫な肌となった。しかし、だんだんと下痢をする人が増えてきた。便所は海の上に作り、長い便所の列が出来、たれ流し

である。そのためか下痢患者が増え、赤痢になって死亡する者も出てきた。しかし、工事は次第に忙しくなり、昼夜兼行で行われることが多くなった。この島は、南洋群島中の第六根拠地隊となり、重要な基地となってきた。

物資の輸送船も時に入ってきた。朝鮮からの軍夫も入って来た。朝鮮の人は皆、靴下に唐辛子を入れたのを二本も三本も持っていた。「ブラジル丸」に続いて、「アルゼンチナ丸」「新田丸」「竜田丸」（一万八〇〇〇トン）も物資を積んで入港した。先程申した如く、第四十二班（シニ班）は病死者を火葬にする役もしたり、時には椰子の木の下の映画会もあった。

我々作業の栈橋工事も二本とも大分進んできた。ある日、突然潜水艦が入港し、夕方駆逐艦も入港してきた。開戦二日前のことである。水兵さんが大勢上陸し、艦に乗り込めば煙草は吸わぬからと言い、軍夫達にくれていった。水兵は「新高山登れ」の命令で「ハワイ攻撃をする」と秘かに言っていた。そして、翌日は一隻も残らず出港した。私共には日米戦争の起きる

ということとは前もって判っており、「戦争は勝つもの」と當時は信じていた。

昭和十六年十二月八日未明、戦果の発表があり「真珠湾攻撃とガム島・ウェーキ島占領」の報が伝わり、皆大喜びであった。いよいよ暮れも近づき、正月の餅をコンクリート造りの臼で搗き、ささやかな正月を迎えた。その後も、ハワイに一番近いこの島では全力で工事が進められた。

一月、二月は別に変変わったこともなかったが、日本国敗戦の第一歩となるかもしれない重大事件が起きた。三月一日、夜明けと共に、ちょうど朝礼の始まる少し前、地響きと共にバラバラと大きな音が出た。上を見上げると、宿舎のトタン屋根が穴だらけになり、室内を見れば畳である毛布に破片が、いっぱい落ちていた。前を見ると爆弾が司令部に命中したのか、メラメラと燃え始めていた。これが、開戦以来初めての米軍重爆撃機による空襲であった。

小原部隊の兵士が飛んで来て本部と連絡をとった。司令部は右端に司令官、左の端に参謀が寝ていたとい

う。あまりにも正確に爆弾が命中し、不思議の感を後になり抱いたという。我々にも急いで防空壕に入れとの命令が来た。急いで壕に入ったが、見たことも無い出来事であったので、壕を出て空を見た。爆撃機が編隊で急降下し爆弾を落とした。一時間五十分の空襲であった。こんな狭い島でのこと、「死ぬかもしれない」と仲間と話し合ったが、空襲時間の長かったこと。

湾内を見れば、大小五〇隻ぐらいの艦船が、右往左往していた。連続して行れた空襲もやっと終わり、平常に戻ったが、軍夫には一人の犠牲者が無いのに、軍人の方は、八代司令官（海軍少将）以下二十人ぐらいの戦死者を出したという。そして小原部隊の庭で茶毘に付された。そして小泉少将が後任として東京から来られた。

私は、軍人ならぬ、軍夫という軍属で、軍人でも体験の少ない、太平洋の第一線クエゼリン島で基地造りをし、恐らく初めてであろう悲惨な空襲も体験した。まさに、開戦前から開戦三カ月余の出来事である。そのためこの軍人の労苦調査の初めに、この体験の話を

したのである。

続いて、私にも大きな変化の時が来た。事務所から、徴兵検査を受ける対象者は内地に帰ること、という達しであった。このため私は、一万七〇〇〇トンの捕鯨母船「日新丸」に乗り内地へ帰ることとなった。この船の内部は缶詰工場になっていたが、船底は機雷をいっぱい積み込んでいて、機雷を各島に降ろしながら内地へ向かった。トラック島、ウェーク島、パラオ島と、二十三日間かかって横須賀に帰港し、私は四月八日帰宅した。そして終戦後、復員したのも四月八日であった。

徴兵検査は六月、役場の兵事係の引率のもとに上諏訪の小学校で一泊二日で行われた。私は第一乙種だけで現役兵として扱われる。当時は誰もが「兵隊に行く」ことを希望し、行かない人は恥であった。まさに軍国主義の国家であり、戦時教育は徹底していた。検査の時、私の体は真っ黒で南洋で軍犬として働きのに行ったことについて、徴兵検査官から誉められた。帰宅して父と相談して父の望みの蔵を、私の兵隊に行く

前に建てることとした。

工事中、入隊の通知が来た。重砲兵の四番、昭和十八年一月二十三日、広島集合の通知であった。我が家も活気づき、やっと土蔵も仕上がった。私は家を出るとなると心配で、それから身を入れて家業に励み、白炭を焼くことも教わり、白炭焼きも始め、順調に仕事は進み、十二月三十一日に仕事は打ち切った。いよいよ、年がかわれば出発するので日はなかつた。

好きなウサギ獲りもし、出発の日の料理の材料にもしようと、趣味をまかね幾日かを過ごしたのである。その間、二階の屋根裏で「勅諭」の暗記と、出発時の挨拶の予行練習もした。その時、本家の叔父は、内緒と言って当時としては大金をそとくれ、また餞別も百二十円として貰った。その叔父も私が復員した時は亡くなっていた。

私は近所の人を作ってくれた千人針の腹巻に二十円を縫い込み、三百円を父に渡した。

出発の一月二十日、早朝より山の上の氏神に詣で、武運長久を祈る。続いて、村の集会所前で区長のお言

葉を頂き、役場で村長が壮行会を催してくれた。出征兵士は乗馬で行く、その土地の習慣に従い、叔父の馬に乗り塩尻駅まで行った。その後、人数が増し大勢となり、汽車の中で夜を明かした。

翌日、広島到着。身体検査、支給品配布、家から着ていた衣類等は全部家へ送り返す。その間四、五日かかり、夕方関釜連絡船で八時間、朝鮮は列車、二昼夜にして終点の旅順着。一月二十九日夕、付近は小雪が降っていたが、大勢の兵隊が迎えに来ていた。軍隊は敵しい所と思っていたが、迎えは第六十四部隊第一・第二中隊の人達であって、それぞれの隊に向かった。

我々新兵は一班三十人、安心と心配とが交わって複雑だったが、班長はじめ助手・古兵の方々は皆、良い人で安心した。しかし、戦友となり、隣の寝台に居た室木二等兵は間もなく肺炎にかかり入院、三日目に死亡したため、周田の古兵は私のことを気遣ってくれ、幸せな環境に感謝した。

中隊長の精神訓話で、明朗、元氣、率直を標語としていた。食事は時間をかけて食べよ、食べ終わっても

命令あるまで立つことは許されぬなど、私的制裁も止められており、従来、我々が聞いていた暗い内務班ではなくて幸せであった。

重砲兵隊は、観測・通信・一般（砲手）に分かれており、指揮小隊は観測と通信であり、私は有線通信で十二人、観測六人、残り一般となった。一般は、火砲の組立操作、射撃が任務である。毎朝点呼が終わると兵舎の周りを三回駆け足、手旗練習をする。私は手旗は苦手のため、特訓を受け、苦手意識はとれた。次のモールスは前もって勉強していたので皆より良く出来た。通信は毎日走ることが日課であり、他の班より優れていた。

私は、戦況が思わしくなく長く続くと感じて下士候を志願した。故郷の父は反対であったが、中隊で九人で、一期検閲も終わり野外演習に出ることが多くなり、下士候の教育も始まり、学科の勉強、銃剣術と励んでいた。

私は、古兵が食べぬ乾パンを集め手箱に入れてあったが、内務検査で中隊長に注意を受けた。私は「私は

貧乏な家に生まれ、物を粗末にしないよう教えられていました。乾パンを捨てるのが惜しく、皆集めて手箱に入れました」と答えた。中隊長は「お前の言うことは本当のことであるが、軍隊には規律があるから勿体なくとも規律は守らねばならぬ」と言われたが、心だけは誉められた。また、貯金も無駄使いせず貯めたが、今思えば真面目ばかりが能でない、時には楽しめば良かったと思うことがある。

私も下士候は、十二月一日、教育隊に入校することができ、鶴屋見習士官の特訓が行われた。兵器検査も済み、二昼夜かかって阿城に到着したが、途中半日ぐらいいは人家もなく満鉄の官舎だけが建っている所もあり、我々十人は無事入校した。教育隊は満州第三〇七部隊と言い、部隊長は中佐で五個中隊、千人が入校出来る。満州・支那方面の者が教育を受ける場所である。我が第五中隊の中隊長は神田少佐、第二区隊長は木村中尉であった。観測・通信・一般・自動車と四区隊入れ込みの教育生活が始まった。

隣りの部隊は、独立重砲兵第七大隊で、二〇〇〇部隊

と言ひ、攻城重砲で二十四センチ榴弾砲[㊦]（特二四榴で、口径が二四センチより大きかった）であった。教育が始まったが一貫して精神教育であった。常に「反省・謝恩・感謝の念」を忘れぬよう行動すること「心を正し、身を修め天地に恥じない行動を」と、私は今でもこの教えが身につき実行をしている。夜の点呼が済めば「反省録」を提出、戻ってくる時は、注意事項等が書かれていた。動作はすべて駆け足、いつも班長の竹刀が待っていた。北満東寧等の者は、予想以上の寒い所で二時間交替の動哨勤務をしていると言ひ、阿城での零下二十度は非常に暖かく感じられるという元気の良い連中であつた。

昭和十九年三月、私もだけが残り、四個中隊は原隊復帰となり、その後は幹部候補生が入隊してきた。私どもの教育も特科だけでなく、一カ月宛、観測教育、一般砲手の教育を受けた。満州は赤土地帯で雨が降れば泥濘、大気が良ければ土煙の中で演習をした。

一年後、原隊復帰の時が来て、卒業式は営庭で行われた。優等生は東寧出身の村山候補生で立派な人で

あった。やはり東寧の厳しさに耐えたからであろう。別れの晩は、区隊長も大尉になり、涙を流しておられた。区隊長は少尉候補生の時、夜も寝ずに勉強し、一切の典範令のどこの頁の第何行に、こう書いてあるなど、一字一句違っても注意する神様のような方であり、私は、木村区隊長のもとで教育を受けたことに感謝し、誇りと思っていた。私は、大連の第三一二部隊に転属となった。

第六十四部隊は十八個所に分かれ、主力は南方に行ったと聞いた。十一月三十日、大連に到着、山を越え老虎の本部に到着、十二月一日、伍長任官となった。第三一二部隊は大連湾の警備が任務であった。年が明け朝鮮の兵隊が入るので大連の司令部へ下士官以上の教育を受けに行ったが、昭和二十年一月の初年兵は朝鮮の兵でなく、内地の広い範囲からの一年繰り上げ入営（大正十四年生まれ）は大連、満州から兵約三〇人で、内地からの兵約一〇〇人は、水筒の代わりに竹筒を持って来た。内地には物資が無しということを見せつけられ、本当に情けないと思った。

早速、各部署割をし、教官・助教も決まった。私は初年兵教育を始めたが、補充兵の中には高等教育を受けた人も多く、物理学校の先生の池田氏に電気関係、特に電話器の説明をしてもらった。助教の永井兵長も優秀な人であったので、この二人の協力を得て何とか助教の任務を終えた。次は手旗、モールス訓練に入っただが皆覚えが悪い。いろいろ考えて、防空壕の中で眠らせ、前後一―二時間練習をした。そのうち自分で早起きし一生懸命覚えてくれ、ようやく成果が上がりはじめた。

一期の検閲も何とか終わり、三地区に配備に就かせた。通信分隊長転属の時は送別会を開き、涙を流して喜ばれた。その後、私が分隊長となり陣地へ移った。陣地といっても高射砲一門だけで、湾出入りの監視が任務であった。この頃は、連合軍が九州に近付いていた。大連埠頭付近に米潜水艦が出没すること、空襲も何回あったが、旧式の砲ではB29に届かない。敵の目標は大連埠頭、満州重機、鞍山製鋼であり、湾内の輸送船が目の前で沈没するのをどうすることも出

来なかった。

夜は無線器で海外放送を聞いた。永井兵長も「日本は戦争に負けた」と言っていた。将来が不安になったが、満州は一番の安全地帯であると思っていたが、アメリカのデマ放送は正確なものであった。昭和二十年七月、私は奉天第五四九部隊へ暗号下士官教育に行くことになった。約百人の下士官が集合し、最初は数字を書く練習であった。

八月九日夜、突然ソ連軍が侵入してきたので、早速原隊復帰を命ぜられ、翌夕方奉天を後に大連へ向かった。その後防空壕の穴掘りを始め、遂に敗戦の日が来た。前途はなくなり、夜は酒を飲んだり、残念会をした。私はその日から煙草を吸うようになり、現在まで禁煙することが出来ないでいる。

一週間後、兵器返納の命があり、大連市へ重機・軽機・小銃・観測・通信器等をトラックに積み返納に行った。ソ連軍は緊張して我々を見ていた。見れば、ソ連兵は左右両腕に時計をはめ、胸には万年筆をいっ

ばい入れていた。

次は移動の命令で、金州の新病院集結とのことであつた。近代的な陸軍病院も、もう少しで完成するところであつたとのこと。移動は分配した荷物でいっばいなため、満人の車を雇い二日かかって金州の新病院に集結した。関東州で集まつた将兵七千人、シベリア行きと決定し、千人単位の大隊を編成した。

シベリア行きが始まつた。私は第七大隊であつたが、第六大隊までがシベリアへ行き、第七大隊は関東州に残ることとなつた。行き先は大連で、昼夜兼行の行軍が始まつた。眠りながら歩き出した。夜は雨にも降られ、やつとのこと夜、大連埠頭に着き、アンペラを被つて一夜を明かした。翌日宿舎の配分で二〇四倉庫という大きな倉庫であつた。倉庫の三分の一ぐらゐに千人入ることとなり寝る準備をした。

いよいよ、思いもよらぬ苦しい生活が始まつた。作業は船の積み込み作業。大連は五つの埠頭があり客船は第五埠頭で、他は貨物の積み降ろしの埠頭である。従つて埠頭全部が倉庫で中に鉄道が入っている。いよ

いよ仕事が始まったが、昼夜兼行で十二時間続いて働くことになった。

積み込みは、満州重機、鞍山製鋼の機械、鉄屑までもである。満州にある機械・器具・工具・ボルト一本まで残らずソ連が本国へ送ってしまった。船の中に入れば十二時間出ることが出来ない。夜中になれば眠くなり、眠いなあの声の連続である。この仕事は四カ月以上かかり、行先はウラジオストックとのことである。皆、荷物の下にならぬよう注意した。仕事から帰ると、中隊ごとにドラム缶風呂を作り、風呂に入れるようになった。

それから皆が苦しんだり、切ない思いをしたのは食物のことであった。食事は主としてパン、スープであった。パンも六人切り、少ない時は十二分の一切の割り当てであったので、皆帰るまで毎日が空腹の連続だった。従って栄養失調になる人も多く、命を落とす人も出てきた。腹が減ると満人と、衣類と食物を交換して食べた。

四カ月間の作業も終わり、旅順へ帰ることとなった

が、大連・旅順まで二昼夜にわたる行軍であった。旅順の入り口が元第六十四部隊であり懐かしかった。その左の第四一五部隊を見ながら歩いたが、ソ連兵が大勢入っていたので、複雑な、残念な心境であった。

やっと旅順の塩田に着き幕舎を建てて生活が始まった。塩田なので雨が降ればすぐ水が入ってきて多くの病人を出し、死亡した人も多かったと思う。旅順での仕事は学校その他大きな建物の改造、補修、その他雑役であった。作業時間は、夜明けより日暮れまでの約十時間の労働であった。朝出発時にはソ連の歩哨が来て人数を調べるが、何回やっても数が合わない。五列にしたり、十列にして人数を数えていた。大体、ソ連は教育を受けない人が多く、従って兵隊はなかなか進級できないとのことであった。

夜、寝る前に翌日の弁当を渡すが、我慢出来ず食べずまい、翌日昼食抜きの人もいた。その後、私も背中が痛くなったが我慢して仕事に行った。ロシア人の平熱は三十八度だから、少し熱があっても病人として認められない。そのうち、私も朝起きたら呼吸が出来

なくなり医務室へ行った。私のは胸膜炎であったので、注射器で水を抜き取ったとき失神してしまった。

幸いに軍医の宮沢大尉は長野市出身の同県人であった。いろいろと気を使ってくれて、出来るだけのことをしてくれたが、ここに居ては体に良くないし、よい手当ても出来ぬからと金州の元陸軍病院へ行くことになった。

金州の陸軍病院はバラック建てではあるが百メートルぐらいの病棟が十五棟ほどあったが、その後間もなく日本の軍医が入ってきて、さらに旅順の塩田幕舎生活の患者が次々に入ってきて来たが、毎日四、五人が亡くなり、多い日には七、八人という日もあった。皆、栄養失調から起きた病気が多かったようである。毎日リングゴの木の下を掘って夕方埋め、次の朝は隣のリングゴの木の下を掘った。死んだ人は担架に乗せて、ロシア人の命令で衣類は全部脱がせて埋めた。

亡くなった人の服のポケットを見れば、若い奥さんの写真やら、幼い子供の写真が出てきて、哀れさを感じさせられた。一番辛かったのは私の教育した初年兵

が惨めな死に方をしたことである。一人は福岡市の内山重徳、一人は満州開拓団の藤本千代二、奥さんと子供のある人で、終戦後逃亡したが、また戻って来た。

一人とも、虱と銀蠅に攻められ惨めなものであった。

死ぬ前、内山が大根を食べたいというので、満人の畑に盗みに行って食べさせた。生大根を喜んで食べた彼の姿を忘れることは出来ない。二人とも、二十代前半の若者であった。ある朝行った時には死亡しており、目、耳、口、鼻等からは真っ赤に血を吸った蛆が這い出て来たという哀れな姿であった。銀蠅対策も、周りにガーゼを張って患者につかないようにしたが、どこからか入り予防出来ず、体の中に蛆を産みつけられてしまった。

私の病気の方はだんだん良くなり、慢性伝染病棟の部屋長を命ぜられた。私と衛生兵と二人ですることになった。慢性伝染病と言っても治る見込みの無い病人を入れる所である。ただし、入り口の大部屋には特攻隊生き残りの見習士官八人と、他の部屋に稲富守太郎少尉が入っていた。この稲富少尉こそ帰国するまで一

緒に生活した人であり、我が有明町の人で九州電力の重役さんになったが、度胸も良く勉強家でロシア語も話せる状態にまでなった。

後に、私は炊事班長を任せられ、満人の家はオンドルで暖かく本当に助かった。ロシア人も民族によっては進級も出来ず良い事がないので、早く帰りたいと言っていた。一週間に一度伝票を持って、歩哨が付いて糧秣受領に行くと、歩哨が「カルピス」をしろと教えてくれた。ロシア人は皆、カルピスの専門で、皆、かっぱらいをするのを見つかったら返すというやり方である。糧秣受領は五、六人で行くが、ロシア語の達者な者が受付で話をする際に、品物の場所を確認し、品物運び出すが、見付かったことはあまりなかった。長いズボンや長靴の中に穀物を入れて帰ったこともある。悪いことではあるが、空腹の仲間が待っていることを思うと、このようなこともあったということである。

昭和二十三年三月、突然「帰国命令」が下った。大

連市民二十七万人、続いて軍人、軍属の引揚げということになった。皆、夢かとはかりの喜びようであった。その後、大連への移動命令が下り、皆荷物は軽くなったので喜びの移動となった。全部集合してみたら隊の者はかりであった。

三月二十七日夕刻、第五埠頭より乗船、内地へ向かった。船の中で恨まれた者の荷物が海に捨てられたという話を聞いたが、軍隊も、その頃は上も下も無くなった。上陸は佐世保の埠頭で、山を越して工廠へ入った。まずは身体検査をし、いろいろの手続きをするのに数日かかったと思う。

私は病気が治っていないので、帰ったら病院へ行くように言われた。金は三十円貰ったが、煙草一個三十円で無一文となり、飲まず食わずで二日間かかって到着したのが中央線の信濃境であった。母の生家に行き一泊した。次の日、父が迎えに来て、やっと帰宅したが、忘れもしない四月八日であった。

昭和二十三年結婚し、町役場の協力で、有明干拓中央指定地に入植以来四十四年にならんとしている。昔

は人生わずか五十年と言われたのに、現在は八十歳は人生の通過点と言われるようになった。復員し結婚し金婚式も迎えられたことを心から神仏に感謝申し上げる。

満州事変から終戦処理まで

香川県 浮田 信茂

明治四十三（一九一〇）年三月十八日、香川県綾歌郡国分寺町の農家の長男として生まれ、農業学校を卒業し農業に従事していた。昭和六年徴集で中種合格の印を押され、その時は合格になったと大変嬉しかった。仲間は乙種だったので特にそう感じたのかもしれない。

善通寺、第十一師団の輜重兵第十一大隊（後に輜重兵連隊となる）に入営した。その年には満州事変が勃発したので、軍国色がだんだんと濃くなってきたが、都会では金融恐慌、東北地方は冷害のための不作、日

本国中が内外共に不安というか国難ともいえる時期であった。

当時、輜重兵の初年兵教育は半年であったが、教育が終わるか終わらぬうち、第十一師団は満州へと出兵することとなった。

柳条湖で事変が勃発したので、奉天から柳条湖へと張軍と戦った。敵はなかなか強かったが奉天駅のそばに敵の兵舎があり、そこを占領し宿舎にしていた。食糧は内地から送られたが、さつま芋はかますに入れて送ってくるから凍っていた。輜重兵特務兵を連れて駄馬で輸送するので、我々は馬に乗り指揮をとって兵站から前線へと進んで行った。第十一師団の四個連隊は全部出動し、張軍を北支へ追いやって事変は一応終結したので、原隊へ帰還し、現役二年間を務めて満期となり家に帰った。

家は農家で人手が足りなく困っていた。私は長男であったが学校の教員をしていたので、退職し農業に専念をしていた。ところが、昭和十二（一九三七）年七月、支那事変が勃発したため、昭和十三年に召集さ